

2017 年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書		提出日	2018 年 8 月 19 日
氏名：小笠原 佑吏		実施国：フィリピン共和国	調査研究
活動名称	フィリピン共和国ターラック州における完全母乳育児に影響を及ぼす要因の検討		
実施期間	2017 年 7 月 1 日 ~ 2018 年 6 月 30 日		
(1) 申請した動機			
<p>青年海外協力隊での活動の中で、乳幼児の低栄養問題が気になり、帰国後も乳幼児の栄養を研究テーマに、国際母子保健や公衆衛生を学びたいと考え、大学院に進学した。これまでの経験やフィールドで得た情報を整理し、体系的に基礎から学ぶことで、分析能力や問題解決能力を高め、現場へ還元していくことができるようになりたいと考えたからである。</p> <p>母乳育児は科学的根拠のある栄養対策の一つであり、WHO/UNICEF は 6 ヶ月までの完全母乳育児 (Exclusive breastfeeding) を推奨している。母乳は、下痢症や他の感染症から乳幼児を守る免疫を含むとともに、健康に成長発達するための最適な栄養であり、母子の愛着形成などの心理学的な利点や、費用対効果が高いという経済学的な利点がある。しかし、今回活動フィールドとしたフィリピンでは、6 ヶ月までの完全母乳育児率は 34% と、他の ASEAN 諸国と比べても低くなっている (UNICEF, 2014)。また 2 ヶ月未満児の 27% は人工乳を与えられている (DHS, 2013)。</p> <p>そこで、低率となっている 6 ヶ月までの完全母乳育児について、母親やヘルスワーカーへの聞き取りから、母親が母乳育児を継続できない要因とそれを取り巻く社会・文化的側面を明らかにすることによって、母乳育児の促進と乳幼児の栄養改善に貢献することを目的に本調査研究を行うこととした。</p>			
(2) 活動内容概要			
<p>研究デザイン：In-depth interview と Focus group discussion (FGD) を用いた質的研究</p> <p>調査場所：フィリピン共和国ターラック州の 2 ヶ所のバランガイ (最小行政単位)</p> <p>本調査研究は、フィリピン熱帯医学研究所 (RITM) と東北大学大学院医学系研究科微生物学分野研究室の「フィリピン新興・再興感染症研究拠点における国際共同研究」のもと、下痢症の追跡調査が行われているターラック州の研究拠点の協力を得て行った。</p> <p>参加者数： (1) 2 歳未満児の母親 19 人 (4 つの FGD)、5 人 (In-depth interview) (2) 郡保健施設、州立病院の助産師、看護師、村落ヘルスワーカー計 10 人 (In-depth interview)</p> <p>母親は、RITM と東北大学のコホートデータベースから、母乳育児状況をもとに研究対象者を選定した。対象となる 2 歳未満児の母親で、6 ヶ月まで「完全母乳栄養」、「混合栄養」、「人工栄養」の 3 グループに分け、それぞれ 4~5 人の少数グループで FGD を 4 回行った。また、「混合栄養」グループの中から、さらに詳細な情報を得るため、5 人に In-depth interview を行った。</p> <p>ヘルスワーカーは、地域社会全体に精通し、十分信頼できる情報提供者を選び、10 人に In-depth interview を行った。</p> <p>インタビュー方法： インタビュー調査者は RITM からの協力を得て選出し、現地で最も話されている現地語で行った。調査者には、インタビュー法等について事前に十分な研修を行い、インタビューガイドに基づいてインタビューを実施した。インタビューは、参加者の許可を得て全て録音した。時間は FGD で 1 時間、In-depth interview で 30 分程度であった。</p> <p>分析方法： 録音データは、逐語的に書き起こし、現地語から英語に翻訳した。その後、内容分析の手法を用いて分析を行っている。</p> <p>倫理的配慮： 本調査研究は、RITM と帝京大学の倫理委員会の承認を得ている。また、インタビュー前には全ての対</p>			

象者に調査の概要を説明し、書面にて同意を得た。

活動報告：

事前調査(2017年5月)、本調査(2017年10~11月)を経て、データ収集は完了したが、現在も分析を続けている。現時点での知見を、調査協力機関へ書面で報告した。また、2018年2月に行われたRITMと東北大学の共同研究10周年記念フォーラムにて、ポスター発表を行った。

(3) 活動の成果・苦勞した点・反省点等

本調査研究で得られた知見については、プロジェクト報告書へ記載する。

調査研究を行うにあたり、フィリピンの倫理委員会の承認を得ないといけなかったが、途上国の倫理委員会申請は通常2~3ヵ月かかると言われていたものの、私の場合は5ヵ月を要した。修士課程が1年と時間に限りがあったため、いつまでも見通しの立たない状況で待つのが一番大変であった。

また、インタビューはグループディスカッションを予定していたため、フィリピンの母親達に、同じところ、同じ時間帯に集合してもらわなければいけなかった。1件1件家を訪ねて依頼してまわったが、時間や約束の感覚は日本人と全く違うため、来ると言っても来てくれないことも多かった。さらに、インタビューは現地語で行うため、ファシリテーターをしてくれる協力者を首都から呼び寄せることになっており、多忙なスタッフに現場に来てもらうためには、日程調整も苦勞した。

インタビューが終わっても、録音データの文字起こしや、現地語を英訳してもらうのも、限られた滞在時間との戦いであったが、いろいろなタイミングが合ったことや、協力してくれたスタッフが皆心強く、頼もしい仕事ぶりで、無事にフィリピンでのインタビュー調査が完了した。

一から苦勞して取ったデータは、私にとっては本当に貴重でありがたいものである。何より、インタビュー中に母親達がとても嬉しそうに自身の経験談を語ってくれたのが印象的であった。また、現地の方が「これから母乳育児を促進していくための大事な機会になった」と声をかけてくれたことは励みになった。貴会の支援を含め、本当にたくさんの方々の方々の協力なしには乗り切れず、感謝の気持ちでいっぱいである。ありがとうございました。

(4) 今後のプラン

得られた知見は、調査協力機関や各保健施設に報告する他、2019年1月にシンガポールで行われる第22回EAFONS(East Asian Forum of Nursing Scholars)学会にて発表することを予定している。また、学術雑誌に投稿するため、現在、共同研究者とさらなる分析を行い、論文化に向けて準備をしている。母親が母乳育児を継続できない要因とそれを取り巻く社会・文化的側面について、今後さらなる研究につなげ、効果的かつ文化的に適切な保健指導を検討していきたい。